



Title	松澤弘陽の経歴と業績
Author(s)	川崎, 修
Citation	北大法学論集, 43(6), 261-280
Issue Date	1993-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/15511
Type	bulletin (other)
File Information	43(6)_p261-280.pdf



[Instructions for use](#)

松澤弘陽教授の経歴と業績

川崎 修

松澤弘陽教授は、今更改めて紹介するまでもなからうが、日本政治思想史なканずく近代日本政治思想史の研究を長年にわたってリードしてこられた。松澤教授の研究領域は、教授の学問的出發にあたる日本社会主義の研究に始まって、内村鑑三、福沢諭吉といった近代日本の思想的巨人達との知的格闘、さらには近代日本における文化接触の問題等、近代日本思想史の根本問題について多岐にわたっており、綿密に練り上げられたそれらの力作は、常に学会に大きな反響を呼び、かつ、今日に至るも各専門分野の到達点を示すとも言うべき古典的地位を占めている。教授の経歴については別掲の年表にゆだねて、本稿では教授の業績について、はなはだ不十分ながら、その一端を紹介したい。

一九八九年に出版された『日本政治思想』（放送大学教材）の冒頭で、松澤教授は、日本政治においては普遍的原理が無力であるという、K・ウォルフレンの問題提起を受け止めた上で、そうした日本の「伝統」のなかで普遍的原理の意味と力を信じて、それによって政治に働きかけようとした人々の思想を追う形で、放送大学の講義を進めると述べている。その際、より具体的には、こうした思想家たちが苦闘した課題として以下のよう

に述べられている。

「第一に、時代と国や文化のちがいをこえた普遍的な真理が、どのような時に今この時という具体的な状況に訴え、その中で力をもちうるであろうか。普遍的な原理が具体的な状況の中で全く実現されなければ、それは力になりえないだろう。しかし

普遍的な原理が具体的な状況の中にかからめとられてしまったのでは、その意味を失つてしまふだろう。第二に、普遍的な原理と利益の要求とはどのようにかわるのだろうか。社会が発達すればするほど、人々の利害関心は鋭くなり、政治の世界に噴き出す利益の要求はますますであろう。理と利、正義と利益はどうかかわるのであるか。この問題をめぐつて、普遍的な原理と利益とはあいれぬという考えから、一致しうるといふ考え方まで、答えはさまざまに分かれた。第三に、相異なる自己利益の間に一致を見出すことは可能だろうか。私利と公益とは一致しうるだろうか。個人の権利と社会や国家の全体の要求とは両立しうるだろうか。(『日本政治思想』 十七—十八頁)

政治における普遍的理念の探究、なかならずそうした理念に裏打ちされた「公共性」の可能性という問題、こうした問題への関心は、松澤教授の研究を一貫して貫いているように思われる。公共性の問題への関心は、すでに、日本社会主義に関する研究において、強く打ち出されている。教授は、日本の社会主義の出発点である明治の社会主義が有していた基本的問題関心を「社会」・「経済」を貫徹している利己主義・弱肉強食もたらしている「社会悪」に対して、公益をどう実現するか、私益と公益の一致という理想はいかにして可能なかという問題

に見出ししている。そして、この問題を、教授は、明治維新以来の日本の政治思想家たちを貫いて共有されてきた問題として考えている。

松澤教授は明治以来の日本の社会主義に、大きく言つて二つの系譜を見出ししている。一つが幸徳秋水に代表される「志士仁人」の社会主義であり、もう一つが片山潜に代表される「労働者の団結と都市自治の社会主義」あるいは「自発的結社の形成と討論による自己立法」・「パーラメンタリシステム」の社会主義である。前者は「修養」によつて私益への埋没から脱して「理義」にめざめた道徳的政治的エリートへの献身的活躍によつて私益のアンキーを越えた「公的」秩序を、つまりは「社会主義」を実現しようとする立場として要約出来る。いいかえれば、実現されるべき「公的」なるものの形成主体はあくまでも少数の「前衛的」エリートであるほかないということであつて、こうした考え方の背景には、当然、「理義」によつて律せられた秩序を求めるパッシブネイトな正義感と、大衆の公的秩序形成主体たる能力への深いペシミズムとが、折り合わぬままに結合した一種の政治的ロマン主義(松澤教授はこの言葉を使つておられないことをお断りしておく)があるのである。

これに対して、後者は、あくまでも大衆自身が公的秩序形成

の主役であることから出発する。「公的」なるものは、「理義」を体得したエリートが「上から」持ち込むものではなく、大衆自身が、労働組合活動などを通じて、自らを組織化するまさにそのプロセス自体によってのみ形成されると考える。労働者たち自身が自発的結社と討論を通じて自治のエートスを獲得することなしには、私益の外的抑圧ではない、本当の意味での公的秩序の実現、つまりは社会主義もありえないと考える訳である。幸徳秋水と片山潜の評価からもうかがえるように、松澤教授は、第一の系譜に対して第二の系譜に高い評価を与えている。けれども、教授の研究によれば、日本社会主義においては常に、「志士仁人」の系譜こそが「本流」であり続けた。そのことは、マルクス主義が輸入されそれが日本の社会主義の主流となった後にも、形を変えてあてはまるといえる。それは、昭和マルクス主義の「組織」のあり方に如実に現れていた。すなわち、彼らは、ある時はメンバー獲得にあたって、相互の「討議と説得によって合意を組織する」というプロセスではなく、「党」の公定の「理論」にどれだけ通じているかという基準によって選ばれた人々に一方的に——またしても「上から」——声をかけ、人々もこの「荣誉ある」選抜に諾々としてしたがったのだという。しかし、こうした一方的な指令—服従関係が、相互主体的

な自発的結社と討論のエートスのまさに対極に存することは明らかであろう。そして、こうした「理論」信仰を表面上は自己批判した後も、討論を通じての自発的な合意形成という本来の近代的公共性の論理による組織の形成ではなく、リーダーの人格的「高潔さ」への一方的無批判の帰依によって作られた「組織」への信仰は、運動の解体に至るまで残ったのであった。ここにも「志士仁人」の伝統は健在であった。そしてこの伝統は、右翼・左翼、体制・反体制という軸をこえて、いわば合わせ鏡のように当面の敵に対応物を持ちつつ、まるで一つの共犯関係のように、近代日本の政治思想と政治行動において本来の近代的公共性——討論による合意形成と自発的結社のエートス——の成長を阻んできたことを、松澤教授の研究は明らかにしているのである。

この公共性の形成というテーマは、近年の福沢研究に至るまで一貫して、松澤教授が近代日本の政治思想を見る際の基本的座標になっているように思われる。教授は福沢論においても、近代的公共性をなす「国民」形成の問題、「独立の個人と自発的結社の創出」に一つの焦点を定めている。そしてその際、教授は、福沢が、解放された私益の予定調和というオプティミズムとも、私益と切り離された「公益」のリゴリズムとも異質

な、私人として、個人として自立した人々が議論を通じて「自治と自己立法」へと至るといふ論理を模索していたのだという点を強調している。彼においては国会もまた、本来は自己目的ではなく、国民全体によつて修得されるべき議論の「習慣」化の到達点以外の何物でもなかった。こうして、教授は、福沢を自治のエートスを求めた（「国民」形成とはこのことにほかならない）思想家、私益と公益の媒介に苦闘した思想家として描きだしている。（ちなみに、松澤教授は中江兆民にもまた、福沢とは反対の方向からこの同じ問題と格闘した思想家の姿を見出している。）

これまで見てきたことからわかるように、公共性の問題は極めて多様な問題と連関している。特にここで注意すべきは、近代的公共性の形成は、一方で社会の「組織化」の技法（自発的結社や討議の制度化）によるとともに、もう一方ではこうした組織・制度を支える人間のエートスなくしてはありえないという点に特に注目がはらわれているということである。いいかえれば、解放された私益のアナーキーをこえる論理は、個人の主体性の確立、個人主義の確立をとおしてのみ形成されうるということである。福沢の「一身独立」、兆民の「リベルター・モラル」、そして片山潜の個人主義評価への教授の関心の背景

にはこうした問題関心があると思われる。

ところで、公共性の問題は、先の引用からも明らかのように、政治における普遍的原理の役割への評価と深くかかわっている。すなわち、政治における思想と現実との関係の問題である。ここでは長々と論じることができないが、松澤教授の関心は、ここでも、一方で、慣習化した「常識」への無批判な寄り掛かりや、現在あるがままの人間の絶対化や、「世界の大勢」へと依存することによつて政治における普遍的原理の役割を否定ないし軽視する「現実」主義に墮することなく、他方で、冷静な現実分析なしにただ信じる「原理」に固執するリゴリズム——それはしばしば、おのれの「正義」感の自己満足の場を求めるロマンティシズムと結びつくのだが——の限界ないしは不毛をも自覚した、いわばリアリスティックな理想主義の可能性を求めることにあると思われるのである。

思想史の方法という側面から見るとき、松澤教授は、その研究対象に即して、極めて多様な方法を駆使しているように思われる。例えば、日本社会主義の研究においては一部、社会学的ないしは社会史的方法が使われているのに対して、福沢研究では綿密なテキスト分析と比較思想史的な方法が中心をなしてい

る。更に、内村鑑三を論じる際には、伝記的アプローチが強く前面に出るといった具合にである。

けれども、こうした多様さの背後には一つの共通性があるのではなからうか。すなわち、思想を時代の現場に置く、思想を時代との対決の具体的文脈に据えるということ、いいかえれば、思想家たちの思惟を言葉の本来の意味で実存の営みとして理解する、ということではないだろうか。たしかに、福沢のような高度な論理性・体系性を持った思想家と市井の労働組合活動家の思想とは、そのテクストにふさわしい「読み方」が違ってくることは当然であろう。けれども、「時代と対決する実存」としての資格それ自体は対等なものではないか。松澤教授が、アブリオリな「大思想家主義」をとらなかつたことの理由もここにありように思われる。

思想を時代の現場に置くことをめざすということ自体は、思想史の方法としてきわめてオーセンティックなものである。けれども、このことは、おそらく、日本近代思想史においてはとりわけ重大な意味を持っているように思われる。そのことは、日本の近代の思想の成立が、西洋思想の極めて急激な輸入と受容の過程によって、そして輸入思想と日本の諸々の「伝統」との接触・衝突・摩擦・融合の過程によってなりたっていること

と深く関係している。それは、思想の主体の立場から見れば、新しく見出した道具を、それが本来前提としていなかった場所や用途にあてはめようとすることを意味する。そしてそのことは、道具と対象との対決と同時に、道具と思想主体との激しい対決が生じることを意味する。道具が対象を変え対象が道具を変え、道具が主体を変え主体が道具を変え、理論と主体と社会との三重の対決が繰り返り広げられるのである。ということは、元々は外来の理論や思想が、テクストの中では一見同じようであっても、それが現実に機能し、意味を持つ、つまり世界に受肉されるときには、オリジナルと全くことなつたものになりかねないということである。そして、この変容の場をおさえることが、まさに、日本近代の「日本的」性格を明かすうえで重要であることは言うまでもないだろう。松澤教授が常に、テクストの論理を越えて思想家の「思考様式」や実存状況を重視するのもこのことと無関係ではなからう。

とはいえ、そのことは、思想を、思想家個人の生活史や心理プロセスに還元するという意味での「伝記主義」や、反対に、思想家を「歴史的状況」によって「規定」された「歴史」のエージェントとして見るような見方と誤解してはならない。たしかに、思想史という学問もまた、歴史(学)の一つである以上、

それは、多かれ少なかれユニークで一時的な事柄の記述である。けれども、問題はこの「歴史」の対象たる「思想」というものの特異な性格である。というのも、思想の思想たる所以は、それがたんなる時間と空間のなかの個別的・一回性に甘んずるものではなく、なんらかの普遍性——時間と空間を越える性質——を主張するところにあるからである。だとすれば、思想家の個人史や思想家を取り巻く時代の時代史と、思想史は当然異なるものになるであろう。そして、本稿冒頭近くに示した引用からもうかがえるように、松澤教授においては日本政治思想史の探究は政治についての普遍的理念の探究と切り離しては考えられないと思われるのである。

このことはおそらく、それ自体は日本の近代の政治思想を対象として極めて禁欲的に積み重ねられた松澤教授の研究から、逆に、「日本の」近代を越えた「近代」の政治思想全般への豊かな示唆が与えられることの理由の一つとなっていると思われる。例えば、日本の社会主義における公共性観念の貧困は、実は、社会主義が、その「発展」の歴史のなかで失ったものものまさに陰画のようにさえ思われる。また、国民全体の討論の「習慣」とその空間を前提として初めて議会はその機能をはたしうるといふ、松澤教授が抽出した福沢の議會観は、ハバーマスが

『公共性の構造転換』で示した「市民的公共性」の「理念」と見事に一致していることも印象深い。おそらくこのことは、一方で福沢のヨーロッパ理解の確かさを示すとともに、この「市民的公共性」が、ハバーマスによればヨーロッパにおいてもなお「理念」に留まらざるをえなかったということ、つまり自律した個人が形成する公的秩序という理念はヨーロッパ思想史においても「未完のプロジェクト」としてのみ存在しているということを示しているように思われる。こうした問題を浮かび上がらせることを通じて、日本近代思想の苦闘は、「日本の」苦闘であるとともに「近代の」苦闘でもあることを松澤教授の仕事は語っているように、私には思われるのである。

このエッセイは松澤教授に対して多くの意味で「不当な」ものであるというそしりを甘受せねばなるまい。そもそも極めてザッハリッヒで対象に対する学問的禁欲を重んじられた教授の研究を論じうる資格があるのは、まさにその対象に精通した専門研究者であって、日本政治思想史の「プロ」ではない私には、元々その資格はない。そしてそうした筆者の不適格性ゆえに、ここでは、松澤思想史の「思想」を論じるようなアプローチをとることが余儀なくされた。しかし、このことが、松澤教授の

学風にふさわしかったのかどうかはおおいに疑問であろう。さらに、より根源的には、松澤教授の研究史を回顧するのに今と
いう時点が本当にふさわしい時なのかということ自体が、私には
疑わしく思われる。松澤教授の研究生活は、これからいよいよ
更なるクライマックスをむかえるであろう。大河物語はまだ
途中なのである。

(本稿を書くにあたって、北海道大学法学部助手(当時)
小原 薫さんから多大な助言と示唆を受けました。厚く御
礼申し上げます。)

松澤弘陽教授経歴

年七月まで)

一九六五年 七月 一日 北海道大学法学部教授

一九七一年 二月 連合王国、フランス、ドイツ連邦共

和国、およびオランダへ海外出張(シ

エフィールド大学日本研究所客員教

授、オックスフォード大学セント・

アントニーズ・コレッジ客員研究

員、七三年二月まで)

一九七四年 四月 北海道大学学生部委員会委員(七五

年四月まで)

北海道大学学生相談委員会委員(七

五年四月まで)

一九七五年 八月 北海道大学創基百周年記念事業実行

委員会出版専門委員会委員

北海道大学百年史編集室編集員

北海道大学教養課程改革調査室委員

(七八年八月まで)

一九七七年 八月 北海道大学評議員(七九年七月まで)

アメリカ合衆国、メキシコおよび連

合王国へ海外出張(七八年二月ま

一九三〇年 三月 一日 神戸市に生まれる

(昭和五年)

一九四八年 四月 松本高等学校文科甲類入学

一九四九年 七月 東京大学教養学部文科一類入学

一九五〇年 一〇月 東京大学法学部第三類進学

一九五三年 三月 同右卒業

一九五三年 四月 東京大学大学院社会科学研究所修士

課程入学

一九五五年 七月 東京大学社会科学研究所助手

一九六〇年 三月 城戸浩太郎賞受賞

四月 一六日 北海道大学法学部助教授

内地研究員(六一年三月まで)

一九六三年 六月 アメリカ合衆国へ海外出張(六三年

八月まで)

一九六四年 一〇月 北海道大学図書館委員会委員(六六

松澤弘陽教授の経歴と業績

- | | | | |
|----------|---|--|--|
| 一九八一年 六月 | 北海道大学言語文化部共同利用委員会委員（八二年四月まで） | 一九九〇年 四月 | アメリカ合衆国へ海外研修（コーネル大学 East Asia Program 客員研究員、九〇年八月まで） |
| 一九八二年 二月 | 北海道大学評議員（八六年一月二日まで） | 六月 | <i>The Future Japan</i> (University of Alberta Press, 1989, V. Singh, N. Wickenden と共訳・編) の Canada Japan Book Award 受賞 |
| 一九八四年 二月 | カナダ政府 Canadian Studies Faculty Enrichment Award とアルバータ大学 Distinguished Visiting Professor Program により、カナダへ海外研修（八六年二月まで） | 一九九一年 八月 | 国際交流基金より北京日本学研究中心に客員教授として派遣（九二年一月まで） |
| 一一二月 | 北海道大学法学部長（八六年一月二日まで） | 一九九三年 三月三十一日 | 北海道大学教授停年退官 |
| | 北海道大学院法学研究科長（八六年一月二日まで） | 非常勤講師 | |
| | 北海道大学大学院委員会委員（八六年一月二日まで） | 北海道大学（経済学部、文学部、教育学部）、小樽商科大学、北海道教育大学教育学部（札幌分校、釧路分校）、東京都立大学法学部、京都大学文学部、名古屋大学法学部、東北大学文学部、大阪大学文学部、札幌大学法学部、北星女子短期大学 | |
| 一九八七年 八月 | カナダへ海外研修 | | |
| 一九八九年 四月 | 放送大学客員教授（九四年三月まで） | | |
| | 放送教育開発センター客員教授（九〇年三月まで） | | |

学会等

日本政治学会、日本平和学会、ミルの会

Corresponding member of the editorial advisory board of

Modern Asian Studies (Cambridge, U. K.)

社会福祉法人北海道家庭学校理事

松澤弘陽教授業績一覧

The Future Japan, Translated and edited by V. Singh with coeditors H. Matsuzawa and N. Wickenden (徳富蘇峰『将来之日本』

の英訳、解説に詳細な校注を付したもの)

University of Alberta Press

I 著者・訳書・編書

一九七一年

内村鑑三(日本の名著三八)

中央公論社

一九七三年

日本社会主義の思想

筑摩書房*1

一九七四年

西洋見聞集(日本思想大系六六 沼田次郎と共編)

岩波書店

一九八〇年—八四年

内村鑑三全集 全四〇卷(共編)(第七、八、一二、一三、二二)

二各巻の月報に執筆)

岩波書店

一九八四年—八六年

中江兆民全集 全一七巻、別巻一(共編)

岩波書店

一九八九年

日本政治思想

放送大学教育振興会

一九九三年

日本政治思想 改訂版

放送大学教育振興会

日本近代と西洋経験(仮題)

岩波書店*2

II 論文

一九六〇年

天皇制体制における労働運動リーダーシップの諸類型(一)

社会科学研究一一巻五・六号(*1に収録)

マルクス主義における思想と集団

『近代日本思想史講座 第五巻 指導者と大衆』

(筑摩書房)(*1に収録)

『伝統』から出発して伝統へ——丸山真男『日本の思想』『開国』

『忠誠と反逆』を読んで——

明治史料三

一九六二年

民主社会主義の人々

思想の科学研究会『共同研究 転向(下)』

(平凡社) (*1に収録)

一九六四年

日本における民主主義の問題

福田歓一編『岩波講座 現代一二 競争的共存と民主主義』

(岩波書店)

日本と西欧との対話―丸山眞男『現代政治の思想と行動』の英訳をめぐって

みすず一〇月号

(改稿して、丸山眞男『後衛の位置から』未来社、一九八二年に収録)

一九六五年

伊藤博文

神島二郎編『権力の思想 現代日本思想大系一〇』

(筑摩書房)

一九六七年

内村鑑三の歴史意識(一)(二)

北大法学論集一七巻四号、一八巻一号

一九六八年

明治社会主義の思想

日本政治学会編『日本の社会主義 年報政治学一九六八年』

(岩波書店) (*1に収録)

一九六九年

内村鑑三の歴史意識(三)

一九七六年

北大法学論集一九巻四号

『西国立志編』と『自由之理』の世界―幕末儒学・ピクトリ

ア朝急進主義・「文明開化」―

日本政治学会編『日本における西欧政治思想 年報政治学一九七五年』

(岩波書店) (*2に収録)

キリスト教と知識人

『講座日本歴史 近代三』

一九七七年

(岩波書店)

留岡幸助の事業と思想―『留岡幸助日記』をめぐって

世界九月号

田中正造と泰西文明『田中正造全集第五巻 月報』(岩波書店)

一九七八年

中江兆民の世界をたずねて―兆民研究の最近の動向

社会科学研究三〇巻二号

“Theory” and “Organization” in the Japan Communist Party, in

J. V. Koschmann ed., *Authority and the Individual in Japan*

(University of Tokyo Press)

一九七九年

西欧の文明論と日本の文明論——福沢諭吉・徳富蘇峰・内村鑑

三 徳永恂編『社会思想史』

(弘文堂)

天賦人權論争覚え書

家永教授記念論集刊行委員会編『近代日本の国家と思想』

(三省堂)

西洋『探索』と中国(一)

北大法学論集一九卷三・四号(※2に収録)

政教社と札幌農学校——志賀重昂を中心に

永井秀夫編『日本近代史における札幌農学校の研究(昭和五

四年度科学研究費補助金研究成果報告書)』

一九八〇年

解題

『福沢諭吉選集第一巻』

(岩波書店)(※2に収録)

一九八一年

文明論における『始造』と『独立』(一)——『文明論之概略』

とその前後

北大法学論集三二卷三・四号

一九八二年

文明論における『始造』と『独立』(二・完)——『文明論之

概略』とその前後

北大法学論集三三卷二号

(一)(二・完)を併せて加筆し、『福沢諭吉年鑑一〇』一九

八三年に収録(※2に収録)。(二)は学術文献刊行会編『国

文学年次別論集 近代四』朋文出版、一九八三年に再録)

札幌農学校と明治社会主義

北海道大学『北大百年史 通説』

(きょうせい)

大正期の北海道大学とキリスト教

北海道大学『北大百年史 通説』

(きょうせい)

Varieties of Bunnei-ron, in H. Conroy ed., *Japan in Transition* —

— *Thought and Action in the Meiji Era, 1862-1912*

(Fairleigh Dickinson University Press)

一九八四年

自由民権の政治思想——覚え書き

社会科学研究三五巻五号

一九八五年

History and Prospect of Canada-Japan Relations: Through my

Personal Experiences

北大法学論集三六巻一・二合併号

一九八七年

札幌とキリスト教への視角(永井秀夫と共著)

札幌市教育委員会編『札幌とキリスト教』(北海道新聞社)

一九八八年

幕末西洋行と中国見聞(一)

北大法学論集三八卷五・六合併号(*2に収録)

『天賦人權論』の世界

『馬場辰猪全集第三卷 月報』

(岩波書店)

非戦を訴えた札幌市民

深瀬忠一・森杲・中村研一編『北海道で平和を考える』

(北海道大学図書刊行会)

一九八九年

札幌農学校・トルストイ・日露戦争——一学生の日記と回想

北大法学論集三九卷五・六合併号

一九九〇年

社会契約から文明史へ——福沢諭吉の初期国民国家形成構想・

試論——

(加筆して、『福沢諭吉年鑑 一八』一九九一年、に収録)

一九九一年

公議輿論と討論のあいだ——福沢諭吉の初期議政観——

北大法学論集四一巻五・六合併号

(加筆して、『福沢諭吉年鑑 一九』一九九二年、に収録)

思索と政治運動のはざままで

『植木枝盛集第一〇巻 月報』

(岩波書店)

印刷教材と放送教材のあいだ

『放送教育開発センター研究報告三二』印刷教材・放送教材の相互補完に関する研究開発 (放送教育開発センター)

一九九二年

幕末西洋行と中国見聞(二・完)

北大法学論集四三巻二号(*2に収録)

一九九三年

西洋「探素」と中国経験——一八六〇—一八七一

(北京日本学研究中心) 日本学研究三

III 書評

一九五九年

遠山茂樹・今井清一・藤原彰著『昭和史 新版』思想四二四号

『北一輝著作集』第二巻 日本読書新聞八月一七日

明治史料研究連絡会編『明治史研究叢書』全五巻

日本読書新聞一〇月二六日

一九六〇年

岸本英太郎他著『片山潜 第一部』、片山潜生誕百年記念会編

- 『片山潜著作集』第一、二巻 週刊読書人三月二二日
ある孤高の社会主義者——荒畑寒村の『寒村自伝』をめぐって 週刊読書人六月一三日
鈴木茂三郎著『私の歩んだ道』、河野密著『日本社会政党史』 日本読書新聞一〇月三一日
一九六一年
丸山真男著『現代政治の思想と行動』上、下 週刊読書人二月一七日、二四日
唐木順三・竹内好編『近代日本思想史講座八 世界のなかの日 本』 週刊読書人六月二六日
一九六二年
神島二郎著『近代日本の精神構造』 国家学会雑誌七五卷一一・一二号
『岩波講座 現代教育学五 日本近代教育史』 日本読書新聞四月二三日
一九六三年
中井正一・久野収編『美と集団の論理』 週刊読書人二月二五日
一九六四年
丸山真男著『増補版・現代政治の思想と行動』 週刊読書人八月二四日
留岡清男著『教育農場五十年』 日本読書新聞一〇月二六日
一九六五年
Carmen Blacker, *The Japanese Enlightenment — A Study of the Writings of Fukuzaawa Yūchi*, Cambridge University Press, 1964
大内兵衛著『マルクス・エンゲルス小伝』 共同通信系諸紙
山辺健太郎解説『現代史資料一四 社会主義運動(一)』 みすず三月号
一九六六年
篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導——政治家研究Ⅱ』 史学雑誌七五編七号
一九七七年
開拓使編『覆刻 札幌農学校年報』 日本歴史七月号
一九七八年
木下順二・江藤文夫編『中江兆民の世界』 共同通信系諸紙
一九八〇年
『関根正雄著作集第一巻 聖書の信仰』 週刊読書人二月一八日
福島和人著『近代日本の親鸞』 日本仏教五〇・五一号
一九八一年
大濱徹也著『明治キリスト教会史の研究』

一九八二年

日本宗教史研究年報四号

われら如何に生きん(座談会)

日本評論四月号

和賀真也編『統一協会』、同編『統一協会と文鮮明』

北海道大学新聞六月一日

オルグ、シンパ、パルチザン

『社会学辞典』

(有斐閣)

一九八三年

政治哲学復権の試み——ウォーリン『西欧政治思想史』完結

朝日新聞七月一日

労働運動と組織論一

東京大学新聞六月三日

一九八四年

同時代を超えていた湛山の時論『石橋湛山評論集』

朝日ジャーナル九月二十八日号

自由な眼の現実分析

中央公論一月号

一九八六年

『札幌文庫三四・新渡戸稲造』

札幌の歴史一〇号

予言者の碑

日本発見四号

一九八七年

丸山昭二郎監修、御茶の水図書館蔵『成算堂文庫洋書目録』

丸善ライブラリーニュース一四〇号

一九六四年

アンケート私の読書覚え書

週刊読書人三月一六日

北海道開拓思想史

日本読書新聞五月一八、六月一五日

一九六五年

「ヨハネの第一の手紙」について エクレシアミリタンス二号

一九六八年

丸山眞男「個人析出のさまざまなパターン——近代日本をケースとして」(翻訳)

IV 短文・辞典項目・エッセイなど

一九五〇年

M・B・ジャンセン編、細谷千博編訳『日本における近代の
問題』収録 (岩波書店)

近況報告

エクレシアミリタンス一〇号

一九六九年

北海道と久保栄——私的感想

久保栄研究一〇号

神の国の経綸——「ローマ人への手紙」を中心として——

エクレシアミリタンス一一号

『構想力』と『生活の組織化』——その歴史的背景と信仰の根拠——

エクレシアミリタンス一二号

父の生涯と死

エクレシアミリタンス一二号

松澤先生にお聞きする 政治学サブゼミナール『視点』第三号

一九七〇年

大正デモクラシーと内村鑑三

『国民の歴史』二巻 月報』

(文英堂)

新入生を迎えて

独立教報一一月号

学園闘争一年の反省と展望

エクレシアミリタンス一三号

離山(はなれやま)

エクレシアミリタンス一五号

一九七一年

一九七〇年読書アンケート

みすず一月号

百号記念文集

東京通信一月一五日

アジア研究の文献

エクレシアミリタンス一六号

離山(はなれやま)(二)

エクレシアミリタンス一六号

エクレシアミリタンス誌同人に加入するに当って(エクレシア

ミリタンス誌とわたし)

エクレシアミリタンス一六号

札幌集会の報告

エクレシアミリタンス一七号

今の社会状況をどう捉えるか——松澤弘陽氏に聞く——

エクレシアミリタンス一八号

紹介 ドーア『江戸時代の教育』

北大法学論集二二巻二号

一九七二年

集会について考えて来たこと二・三

近況報告

『第三柏影回顧』以後

『出会い』日本におけるキリスト教とマルクス主義(第一章の

コメント・討論)

(日本基督教団出版局)

一九七三年

帰国を前に

エクレシアミリタンス二四号

一九七四年

ヨーロッパにおける日本学の現状と将来

社会科学の方法二二月号

尾蠅英行漫談（法学会記事）

北大法学論集二五卷三号

『柏影回顧』『向陵誌』と私

第五柏影回顧

一九七六年

藤田先生における預言と福音

エクレシアミリタンス三一号

一九七五年読書アンケート

みすず一月号

略歴

社会思想と信仰の関連、及び『中間報告』Ⅱ・Ⅲについて

『山路こえて』刊行会編『山路こえて』藤田若雄葬儀の記録

キリスト教社会思想研究会刊『無教会主義の研究——社会思想

一九七八年

一九七七年読書アンケート

みすず一月号

想史的研究——第三号

一九七七年読書アンケート

みすず一月号

大正デモクラシーとキリスト教

内村鑑三

キリスト教社会思想研究会刊『無教会主義の研究——社会思想

『世界伝記大辞典』日本・中国・朝鮮編

（ほるぷ出版）

想史的研究——第三号

一九七九年

みすず一月号

マルコによる福音書と私（一）（二）

エクレシアミリタンス三〇、三二号

一九七八年読書アンケート

みすず一月号

エクレシアミリタンス三〇、三二号

アメリカでのクラークと日本にきたクラークと——太田雄三氏の

キリスト者にとっての天皇制（一）

エクレシアミリタンス三一号

の近業をめぐって（上）（下）北海道新聞一〇月三、四日

一九七七年

一九八〇年

北大法学論集三〇巻二号

一九七六年読書アンケート

みすず二月号

一九七九年読書アンケート

みすず一月号

Literary Notes: Poetical, Proverbial, Scientific Ecclesiastical, Jon

みすず二月号

イエス・キリストの十字架による十字架の生涯

みすず一月号

K. Uchimura (1) (2) (3)

東京通信研究会『礎をすえるもの』四号

北大法学論集二七卷三・四号、二八卷二、三号

一九八一年

一九八〇年読書アンケート

『まつりは世俗的行事』の持つ意味——津地鎮祭違憲訴訟をめぐって

『福翁自伝』——真実の伴わり

みすず一月号

北海道新聞九月三日

政治学研究会会報第三号

政治学研究会会報第三号

政治学研究会会報第三号

政治学研究会会報第三号

政治学研究会会報第三号

政治学研究会会報第三号

北海道キリスト教会史史料目録（上） 日本宗教史研究年報四号
ある青春

藤田起編『藤田若雄——信仰と学問』（教文館）

キリスト者・札幌県御用係内村鑑三——新史料をめぐって

毎日新聞（北海道版）一一月二二日

「見えること」——親として教師としての願い——からし種四号

一九八二年

北海道キリスト教会史史料目録（下） 日本宗教史研究年報五号

読書アンケート 北海道新聞一二月二八日

一九八三年

一九八二年読書アンケート みすず一月号

民営の「日本司法博物館」 木鐸一一号

志半ばにして斃れる

『オデッセイ一九八三』 溝口潔遺文集（荒地出版社）

採点された「政治学」講義——一年——七組の場合 環瑠二六号

推せんのごとく 藤田若雄『キリスト教社会思想著作集』（木鐸社）

一九八四年

一九八三年読書アンケート みすず一月号

公開シンポジウム「福沢諭吉と新渡戸稲造——そのナシヨナリ

ズムとインターナシヨナリズム」 比較文化三一巻一号
西洋事情、泰西国法論、万国公法、福沢諭吉、文明論の概略、
明六社

『世界大百科事典』（平凡社）

一九八五年

カナダから見たアメリカ・ソ連・アジア（法学会記事）

巻頭の辞 北大法学論集三五巻五号

一九八六年 北大法学論集三六巻一・二合併号

一九八五年読書アンケート みすず一月号

北海道大学法学部（全国大学法学部めぐり） 法学教室二月号

同窓会の活性化に期待して 北大法学部同窓会報創刊号

一九八七年

一九八六年読書アンケート みすず一月号

岩波文庫創刊六〇年記念アンケート・私の三冊 図書四五四号

留岡幸助（講演）

『一九八六年度キリスト教学校教育同盟 東北・北海道地区
協議会報告』

高杉栄次郎、林竹治郎・文雄

札幌市教育委員会編『札幌とキリスト教』（北海道新聞社）

協議会報告

一九八六年度キリスト教学校教育同盟 東北・北海道地区

札幌市教育委員会編『札幌とキリスト教』（北海道新聞社）

「カタコンプ」に寄せて

カタコンプ九号

一九九一年

一九八八年

みすず一月号

一九九〇年読書アンケート

みすず一月号

一九八七年読書アンケート
こんなところです北大法学部

みすず一月号

一九九一年読書アンケート
ネーションのデスチニーを御担当なされ度

みすず一月号

『北大法学部を読む』

(北海道大学図書刊行会)

法学部ニュース一五九号

一九八九年

(北海道大学図書刊行会)

松澤弘陽先生を囲んで 北大法学部同窓会報『楡苑』八号

本選集の刊行に期待する

(岩波書店)

路傍の人へのまなざし——岡義武先生のこと 図書一月号

『田中正造選集』

(岩波書店)

福翁自伝、西洋事情、泰西国法論、万国公法、福沢諭吉、文明

私淑

(新地書房)

論之概略、明六社

『関根正雄著作集第二〇巻 月報』

(新地書房)

『日本史大事典』

(平凡社)

勇哉君が問いかけるもの——一大学教師として——

(新地書房)

『西洋事情以下は』『世界大百科事典』平凡社、一九八四年、

追悼・報告一九八五山形東高等学校雪洞事故『イサヤ・レク

(新地書房)

掲載の項目に加筆したもの

イエム』

(新地書房)

一九九三年

一九九〇年

(新地書房)

猛獣サーカスから我家の庭まで 法学部ニュース一六〇号

フランス革命と自由民権運動(補足発言)

(新地書房)

大正デモクラシーから総力戦体制へ——東京大学の法学・政治

深瀬忠一・樋口陽一・吉田克己編『人権宣言と日本——フラ

(新地書房)

学瞥見(法学会記事) 北大法学論集四四卷一号

ンス革命二〇〇年記念』

(勁草書房)

演習についてのH・M君の経験と哲学——二人の考える人々に

講師紹介 「大嘗祭に反対する——一・二北海道集會」報告集

(新地書房)

献げる 日本政治思想史演習『文集論之概略——多事騒論——』

小川晃一教授を囲んで(座談会司会)

(新地書房)

(経歴及び業績一覽作成 小原 薫)

北大法学論集四〇卷五・六号

(経歴及び業績一覽作成 小原 薫)